

博物館における利用側の特性と運営側の対応について

岡 田 純 一・宮之原 早 苗

(青山学院大学大学院)

はじめに

現代の博物館における展示(exhibition)は、一般に「展示資料を用いて、ある意図によって、その価値を提示するとともに、展示企画者の考えや主張を表現・説示することにより、広く一般市民に対して、感動と理解・発見と探究を(もたらし、)観覧者が無心を楽しむよう最大限の配慮をし、資料の保存に留意した空間を構築する行為」¹⁾を指し、その内容は、本質的に必ず何らかの教育的な意味を持っていることが前提となる²⁾。しかしこのような展示本来の意味は、運営側の意図や利用側の利用の仕方、そして運営側と利用側の関係の在り方によって大きく影響を受け、変化すると考えられる。そこで本稿では時代的背景なども踏まえながら、博物館における運営側と利用側の現状をもとに、博物館本来の教育的意味を持つ展示活動を行うために双方がどのように関わるのが望ましいのかを考えていくことにする。

1. 博物館の運営方針

博物館法(昭和26年)第1条に法の目的として「社会教育法(昭和24年・法律第207号)の精神に基づき、博物館の設置及び運営に関して必要な事項を定め、その健全な発達を図り、もって国民の教育、学術及び文化の発展に寄与することを目的とする。」と定められている。第2条には博物館の定義として、「この法律において『博物館』とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管(育成を含む。以下同じ。)し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事

業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」と謳われ、第3条2項では「博物館は、その事業を行うに当たっては、土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、さらに学校教育を援助しうるようにも留意しなければならない。」と述べられている。このうち第2条の博物館における教育的配慮とは、運営側がその実際の運営においてどのような意図を構築しているかに関わってくるものであり、これにはまた、運営側が利用側についての理解と配慮を十分に保持していくことが必要である。

このように、博物館法によって上に記した定義がなされたのは、それ以前の博物館に社会的に明確な位置づけがなされ得なかったことや、上記に触れた機能が十分に働いていなかったためと考えられる。また、この法は日本において博物館が運営側中心から利用側である国民中心に転換する方向を明確に表したと言える。しかしながら、この法が制定されたからといって急激にこの転換を実現できたわけではなかった。それは、従来の博物館における運営側と利用側の関係が示しているとおりである。

古代から18世紀後半の近代博物館成立までのヨーロッパの博物館においては、ある特定の階級の人々が彼らの所有していた宝物や芸術品を一般大衆に向かって彼らの富と権力の象徴としてこれらを陳列し、誇示することで民衆を啓発・教化し、支配することを目的としていた³⁾。つまりこれは“見せてやる”あるいは“見させてやる”といった威圧的なものであり⁴⁾、並べられた品そのものの歴史的・文化的価値を認めてそれを提示するものではなかった。そしてこれを利用する一般大衆もまたこのような上からの支配に甘んじ、きわめて受け身的であり、“見せて頂く”ものであり、利用側の博物館運営に対する要望や意見はほとんど度外視して成り立っており、「広く一般市民に対して、感動と理解・発見と探求を（もたらし、）観覧者が無心に楽しめるような最大限の配慮」⁵⁾もしていなかったと言える。したがって宝物や美術品を並べて見せる特権階級とそれを鑑賞する一般大衆とでは、博物館の展示対象物を挟んで相互関係が現在のように多岐にわたっているのではなく、利用側のニーズとは無関係なものであったのではないかと考えられる。

わが国においては、古代から中世にかけては、博物館として独立した施設は有していないものの、貴族・僧侶を中心とした特権階級の人々が大陸渡来の品や教典などの収集・秘蔵品を一部のみにみせる、つまりほとんど一般には公開することはないという形式を取っていた⁶⁾。ここまでの段階において目的として考えられていたのは、ある特定の階級の人々の間だけの私的な満足や武家同志における権力誇示であり、一般の人々を対象としたものではなかった。このように古

代から中世にかけては、ある限られた人たちの間だけで成立していたということ、そして特権階級の勢力を誇示するという同一の目的があることから、西欧とわが国においては、ともに展示対象物を見せる側と見る側との関係にそれほど大きな差異はなかったであろうと思われる。

また、江戸時代に入り、町人層まで学問的・文化的知識が普及するようになると、一般大衆の間でも商業の発達に伴って、人寄せや商業的利益などを生み出すことが重要視される傾向を生んだ⁷⁾。

戦後、社会の変化とともに博物館法の果たした役割は大きいと言えるが、この法の成立により運営側と利用側の間の相違がもたらされた部分もある。その原因は主に次の2点に集約できる。

まず第1に博物館法が利用側にほとんど認知されていないことである。これは博物館法が、運営側が利用側中心の運営を推し進めるものとして博物館を機能させ、それによって生ずる運営上の問題を解決するために制定されたにも拘らず、現在においても利用側は、博物館法の存在自体を知らずに利用している場合が多いことに起因している。

そして第2に運営側が博物館法に準拠した運営を必ずしも行っていないことである。これはかつての伝統や格式などを重んじ、旧態依然とした運営をする館もあれば、江戸時代以降の商業的利益を重視する傾向を持つ館も存在し、それらの館が展示方法の技術などを江戸時代よりもさらに多様化されていることから理解できる。

博物館に対する認識の相違は、運営側と利用側の間だけのものではない。運営側間、利用側間それぞれの中における相違もあると考えられ、これらの相違を認識し、それについて検討することが、教育・研究機関としての博物館における展示の真の効果を発揮するために必要であると考えられる。これらの点については以下に論ずる。

2. 運営側の意図

運営側における相違は主に博物館設立の目的から生み出されると考えられる。ここでは、そのうちでも設立の目的を大きく左右する要因として考えられる地域性と、設置者の意向に基づく相違の2点に絞り検討する。またこれらを挙げた根拠は、既に触れた博物館法第1条から3条を鑑みても明白なことである。

(1) 地域性による相違

東京などの大都市圏においては、多くの人の流入出や文化・情報発信の中心

であることからさまざまな種類の博物館が存在し、常設展示ばかりでなく特別展示も盛んで、海外からの珍しい美術品や芸術品も一般に公開される。さらに新しい施設が次々と開館していくという事実を背景として、各々の博物館が独特の展示内容や方法を研究し、実施することによって、利用側の拡大をはかっている。また、郷土資料館のようにその地域の郷土の歴史や文化に由来する資料を陳列している館も多く見られる。最近では、これらの博物館では「まちおこし」など地域の活性化に主目的を置き、その地域の中心施設とするために近代的な設備や展示を進めている所もある。

大都市あるいは地方都市の博物館と、市町村などの小規模な博物館とは一般的にその施設、展示品や展示方法において差が見られると言え、このような地域性による相違は大都市の博物館が発達すればするほど広がっていく可能性があり、展示に関する今後の課題であると考えられる。

それではなぜこのような地域差が生まれるかについての理由を整理すると、次の2点に集約できる。まず第1に人口密度の違いによる利用者総数の相違が考えられる。これはつまり予算上など博物館の規模や実際の運営にも大きな相違をもたらすものであり、利用側の要望に応え得る社会教育施設となるかにも関わってくると言える。

第2には地域による文化の相違が挙げられる。現在の博物館は「土地の事情を考慮」して運営するべきであるから、地域に根ざした施設として、その地域の文化が博物館の運営に反映することを目指しているのである。

(2) 設置者の意向に基づく相違

現在の博物館には国・地方公共団体、あるいは宗教、学校、企業などの法人が設立したもの、または個人によるものがある。これらはその博物館の目指す方向性によって展示品、あるいは展示自体にも相違が出てくると考えられる。例えば地方都市の公立博物館においては海外の名作を購入し、話題となることでその館の特徴を出すことを目指すものもあれば、市町村立の中小の博物館では観光博物館としてその地域の名所としているものもある。また宗教法人では、その設置母体に関連した資料の展示によって、啓発・教化を目的とする場合もある。企業の場合には、自社のつくった製品や関連のある品物を時代を追って展示したり、あるいはその企業が持つ技術を駆使したもの、さらには百貨店のように店舗の中に博物館を設置し、その百貨店らしさという企業のロイヤリティの向上や、来店客数の増加を目指したポピュラリティのある展示活動を行うということを目的としたものもある⁹⁾。これらは企業の経営戦略の一環として、文化面での社会貢献を目的としている。

3. 利用側の特性

博物館の利用側は多様であり、運営側が事業を行うにあたって、その博物館を訪れる利用側の類型や、彼らの利用目的を知ることは博物館運営にとって重要である。芹沢俊介は博物館の利用側を次の4タイプに分類した(表1)⁹⁾。

表1 自然史系博物館の社会教育計画

手段 対象	資料の展示	印 刷 物	パーソナル・コミュニケーション		
			館 内		館 外
研 究 者 層	資料室展示	研究報告書	(学会)	レファレンス ・サービス	(学会)
アマチュア層		普及誌	研究発表会 談話会		研究会 調査会
勉強層	展示室展示	ガイドブック	講演会		自然観察会 見学会
関心層		博物館だより パンフレット	映画会		自然に親し む会

また布村昇は利用側を次の4タイプに分類し、図1のようにピラミッド型に表した¹⁰⁾。

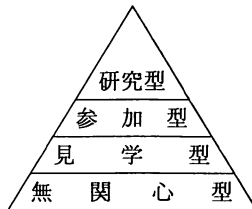


図1 市民の博物館に対する意識構造

しかしながら、著者らが行った調布市民の博物館に対する意識調査を基に、利用側の層化を試みると表1や図1とはいくらか違った分析結果が得られる(図2参照)。

まず郷土博物館の利用目的（複数回答）は、表2の通りである¹¹⁾。ここでは「展示鑑賞」が群を抜いて多いが、これは多くの利用側が現在、「博物館では展示を見る」と考える傾向が強いからであろう。しかし、展示を見る以外に、さらに知識や教養を高めようとし、明確に目的をもって講演会・講座、見学会、教室に出席する利用層もある。これらの利用層を総合（8.1%）してここでは「知識・教養層」と呼ぶことにする。これに対し、なんとなく利用した人は、博物館の事業内容を第一目的にして利用していないということから、前に挙げた講演会などの利用を目的にした層とは異なっている。

表2 調布市郷土博物館の利用目的

利用目的	展示鑑賞	講演会	見学会	教室	何となく	その他
割合(%)	70.0	1.8	4.5	1.8	26.5	13.5

次に郷土博物館の利用経験を見ると、「行ったことがある」（24.7%）、「郷土博物館があることは知っているが行ったことはない」（31.7%）、「行きたかったが、どこにあるのかわからなかった」（5.3%）、「郷土博物館があることを知らなかった」（37.7%）、無回答（0.7%）となっており、「行ったことがある」と答えたのはほぼ全体の4人に1人の割合で、利用経験のない人を合計すると74.7%となる。またここで行かなかった理由として「あることは知っていたが行かなかった」、「知らなかった」が大部分を占めている（表3参照）¹²⁾。このうち前者の、認知しているにも拘らず利用しなかった層は、郷土博物館に対する興味・関心を持たず、無関心の要素が強いと考えられる。

一方、その他の博物館の利用経験に関しては、利用したこと「あり」と答えた人が82.3%、「なし」と答えた人が15.5%というように圧倒的にほとんどの人が一度は博物館を利用している（表3参照）¹³⁾。

このように郷土博物館と他の博物館の利用経験を比較すると、その有無に関してそれぞれの点で大幅な差異がある。その理由としては現在博物館が林立している状況などや、博物館が扱う分野が全体として多岐にわたっていること、展示以外にも魅力的な施設・設備を備えている館も増加してきたということなどから、特定の展示品に限定されがちな郷土博物館よりも、利用側それぞれの選択により興味のある博物館を利用しているためであるとも考えられる。つまりこれは利用側に利用経験をある特定の博物館について尋ねた場合と、あるゆる博物館を対象として尋ねた場合との相違によって生じる差異でもあったと考えられる。

表 3 博物館の利用経験

利用経験 (%) 対象施設	あ り	な し (合計 74.7%)			無回答
		知っている	場所不明	知らない	
調 布 市 郷 土 博 物 館	24.7	31.7	5.3	37.7	0.7
他 の 博 物 館	82.3	15.5			2.2

これまで述べてきたことを一部整理すると、特に意識せず、ひいては明確な目的を持たずに利用するという層が存在することがわかる。こうした層の顕著な例として、既に上述した「なんとなく」利用するという利用層が挙げられる。しかしながらこの層は、まったく無目的というのではなく、展示そのものでなくても近所を通りかかって、あるいは家族・友人に誘われてなどといった二次的な目的から利用している場合が多い。この層は博物館を利用することによりきっかけを掴み、その後において他の博物館の利用や興味のある博物館を利用しようとする可能性もある反面、たまたま利用した博物館に落胆し、すべての博物館という施設に興味を失うという可能性もある。このうち前者の、博物館利用の可能性のある人は、「知識・教養層」にまで至らず、この層に到達するには少なくとももうひとつの層が存在する。それは、展示など運営側の意図する事業自体を目的にするとは限らず、自己の余暇を博物館利用に充てることを望む層であり、これを「余暇・娯楽層」とする。一方後者の博物館利用によって興味を失う可能性のある人々は、博物館との距離が遠くなり、彼らは博物館に対して無関心、あるいは拒絶的な反応を示すことになる。これらの層をそれぞれ、「無関心層」、「拒絶層」と呼ぶことにする。

また調布市郷土博物館以外の他の博物館の利用目的（複数回答）は、表4の通りである¹⁰⁾。ここでは、前述の郷土博物館の利用目的と比較してもあまり大きな変動は見られないが、見学会・観察会などのような明確な目的をもった層が若干増えている。このことから、自己の興味のある博物館においては、同一の人物による博物館の利用は館によって変動するものであり、別の目的をも付け加えて多目的に利用する人が増加すると言える。

表 4 他の博物館の利用目的

利 用 目 的	展示鑑賞	講 演 会	見 学 会	何となく	その他※
割 合 (%)	83.2	4.1	10.5	21.8	6.3

※表 4 (他の博物館の利用目的)における「その他」(47名)の内訳

旅行中に立ち寄った	19名
子どものため	4名
学校で/学校の課題のため	4名
博物館自体に関心があったため	3名
両親・友人に誘われて	2名
仕事で	2名
研究・自分の勉強のため	2名
その他/無回答	11名

「その他」については、もともと多数の選択肢の中から「その他」を選択する回答者は少ないのであるが、それを選択した利用側の内訳を見ても、上述したように利用側がさまざまな利用の目的を持って博物館を訪れていることがわかる。

さらに、この内訳や図1などを参照すると、これまで述べてきたような利用層の他に、より専門的で高度な知識や研究目的を持った利用層が存在する。この層を「勤勉・研究層」と呼ぶことにする。

以上主に調査を基に述べてきたことから、博物館における利用側の分類を図2のように試みた。

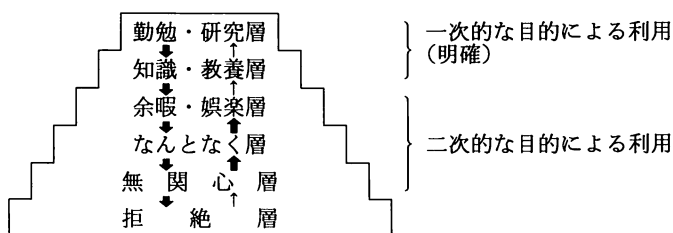


図2 博物館利用における利用側の態度からの分類

図2は利用側があるひとつの博物館を利用した場合、同一人物が同一の博物館でとり得る利用範囲をも考慮した図である。つまり、利用側の利用とは利用時間の量や誰と一緒にいったかという利用形態などで変動し得るということである。また、ここでは利用回数にとらわれないこととし、博物館を利用した際の行動のみに着目した。

まず「勤勉・研究層」は、それぞれの専門分野を持ち、テーマや問題を追及して、より深い知識を得ようとする層である。この層が人数的に少ないのは、研究室を設置している博物館が少数であること¹⁹⁾から、利用側が展示室以外の利用を得ることができない点や、博物館の専門に扱う分野と、利用側の各人の関心領域が高度で狭くなっているため、合致する可能性が低いことなどによるのである。また、この層に属す人は主に研究者である。しかしながら、主婦や学生などでより専門的な領域に関心を持ち、博物館の講座や教室、見学会などに参加するに留まらず、博物館で勉強、または研究するという人もこの層に属していると言える。しかしながら前述の表4における「その他」の内訳からもわかるように、この層はきわめて少数であると言える。

「知識・教養層」は、「勤勉・研究層」ほど専門的ではないが、知的探求心が強く、博物館の展示を鑑賞するのみに留まらず、講座などに参加したり、積極的に博物館に足を運んで知識を深めようとする層である。この「知識・教養層」と「勤勉・研究層」の2つの層は、利用側自らが博物館に対して明確な目的を持って利用するという点で共通しており、次の「余暇・娯楽層」、「無関心層」とは明らかに異なる様相を呈している。

「余暇・娯楽層」は、博物館自体に強い関心があるとは必ずしも言えず、また博物館を利用したとしても学習のためなどの明確な目的ではなく、自分の余暇時間を博物館で過ごし、友人とのつき合いや、博物館に併設するレストランなどの施設を利用するというような二次的な利用目的も多い反面、自分の興味・関心と合致する展示には、自らの余暇時間を割いて利用することもあると考えられる層である。即ち彼らは、博物館に足を運んだことによって、知的好奇心を掻き立てられて問題意識を持つ可能性は十分にあるが、一度訪れてつまらないと感じたら、次からは全く利用しなくなってしまうという可能性も持っている層である。

「無関心層」は、博物館という存在自体に関心を示さない層である。たとえ博物館が近くに存在し、展示や活動が何をやっていようと、それを知る機会があったとしても興味を覚えることはなく、自分からは足を向けようとはしない層である。この「無関心層」と「余暇・娯楽層」の2つの層は、博物館を自らが持つ明確な目的によって利用するというよりも、前述の二次的な目的や、あるいは何かのついでに寄ったというような特に目的を持たない人であると考えられる。

「拒絶層」は、博物館などへ行くこと自体も拒む層で、それは以前博物館を利用した時に有意義と思わなかったり、館員の態度が良くなかったなど何か嫌な記憶がある場合、または博物館が居住地域に存在しないために身近な施設として捉えることができず、最初から自分にとって入りにくく縁のないものとして決めつ

けている場合もあると考えられるが、その多くは博物館という施設を受け入れず、足を運ぶことなど考えもしない人たちである。この層は、上述の各層と比べ、博物館に拒絶反応を抱き、足を運ぼうとしないという点で明らかに一線を期していると言える。しかし他の利用層の場合でも、何か博物館において一度でも不快に感じることがあればこの層に属す可能性は十分に考えられる。このように一度博物館に対して良い印象を持たなくなってしまった人を再び引きつけるのは困難であるが、「拒絶層」のうち博物館を縁のないものとして捉えている人たちは、「余暇・娯楽層」、「無関心層」のように友人からの誘いなどによって足を向け、上位の層に変化していく可能性もあると考えられる。

「なんとなく層」の人たちは、自分自身で明確な目的をもって博物館を利用するということはないことから、「勤勉・研究層」と「知識・教養層」には含まれない。そして完全に個人の趣味や娯楽のためだけの利用とも言えない。また博物館に対して明らかな拒絶反応を表しているというわけでもない。近くにあるから散歩の途中に寄ってみたり、また展示に関する興味・関心というだけではなく、博物館の雰囲気や環境が良いので行ってみようというように博物館を二次的な目的で訪れている人たちであり、また誰かに誘われれば、自己にとって関心がなくても博物館に行く可能性を持つ存在である。つまりこの「なんとなく層」は、「余暇・娯楽層」と「無関心層」の両者に近い存在と考えられる。彼らは明確でなくても、博物館に対する興味・関心を持つ層と、持たない層との間で流動的に存在しているのではないかと考えられるのである。

また、今まで述べてきたこれらの各層は、矢印のように変化する可能性があると考えられる。このため図2では、敢えて段階の各層の間を線で区分せず、段階の幅で人数を表すにとどめた。

「勤勉・研究層」、「知識・教養層」は、博物館の利用に際して運営側の提示を受けずして自らの明確な目的を持っている人であるが、自分の研究、知識や関心に十分応えてくれるにふさわしい博物館が見つけれなければ、その利用の目的は単に娯楽になってしまう可能性がある。つまりこれはある同一人物において、A博物館では「勤勉・研究層」であったが、B博物館では「余暇・娯楽層」となることが考えられるということである。故に矢印の太さは変化する可能性の大きさを表し、上位の層から下位の層へは比較的簡単に変化するが、下位の層から上位の層への変化は難しいことを示している。ただし「無関心層」から「なんとなく層」へ、および「なんとなく層」から「余暇・娯楽層」の上層への移行はこの限りではない。それは既に見てきたように、「なんとなく層」は「余暇・娯楽層」と「無関心層」の両者に類似した性格を持つ存在であるため、この3つの層の中

における変化は、より複雑で頻繁なものであると考えられる。博物館が、利用側全体のニーズに応えることは困難であるが、「拒絶層」の人たちにもその固定観念を打破し、「無関心層」から脱却して、「余暇・娯楽層」から「知識・教養層」、ひいては「勤勉・研究層」に引き上げていくということも、教育・研究機関としての現代博物館の使命のひとつであると考えられる。

4. 運営側の対応

前述してきたように博物館は、さまざまな利用目的、利用形態などによって利用される。しかしながら運営側はこうした幅広い利用をする利用側それぞれに対応していくことが望まれる。つまり展示室をあらゆる利用側にとって、わかりやすく有効なものにするよう目指していきつつ、利用側にさまざまな援助システムが博物館によって講じられていることを認知させることが前提となる。こうしたシステムを構築する際のひとつの手段として、ここでは図2に即してそれぞれの層に特に必要性がある施設について以下に検討したい。

まず「拒絶層」から「なんとなく層」までに関しては、市街地など自然に恵まれない地域では公園など、そして全般的には喫茶店、レストランなどくつろげる付帯施設・設備を充実させることが考えられる。特に「拒絶層」および「無関心層」には、博物館は堅苦しい場所ではなくさまざまな施設があり、彼らの余暇時間を楽しみや憩いなどをもたらすものであることをまず印象づけていくことが必要である。

「なんとなく層」から「余暇・娯楽層」までは、プラネタリウムや体験学習室など楽しく学習できるスペースが必要であると考えられる。前掲の市民意識調査において、新しい博物館にどのような施設・設備が必要であるかという設問（複数回答）では「プラネタリウム」（46.5%）、「図書室」（42.0%）、「講演会・講座などができるホール」（40.2%）、続いて「体験学習ができる学習室」（38.0%）が上位を占めた。これを年齢別で見ると、「プラネタリウム」を挙げた人は20歳代、30歳代がそれぞれ62.8%、61.4%で、他年代と比べ約2倍であった¹⁶⁾。これは若年層が科学技術が発達してきた時代に育ち、身近に感じる人たちであることや、星空への憧れもあると考えられる。また「体験学習室」が30歳代で50.6%と他年代より10～20%近く高かったことも年齢別からの特徴として挙げられるが、この年代はちょうど子育ての時期に当たり、小さい子どもと一緒に楽しみながら利用できる場を希望していると考えられる。つまりこの30歳代を主とする子どもを連れての利用は、しばしば子ども中心の利用となるため「勤勉・研究層」や「知識

・教養層」に含まれず、多くの場合これらの層に該当するとみられる。こうしたことも鑑み、楽しみの中に少しずつ学習の要素を加えていくこと、また「余暇・娯楽層」には、講座や教室などの参加をよびかけていくことなどが望まれる。

「知識・教養層」ならびに「勤勉・研究層」に関しては、他層と比べ目的が明確なので今後も利用が継続すると予想されるが、運営側の援助が十分でなければ、その館において「無関心層」、あるいは「拒絶層」に移行することも考えられる。特に「勤勉・研究層」には施設として研究室などの設置が望まれるが、この層に属す人は少数であると考えられるため、現状ではまだ施設がつけられることは少ないようである。しかしこのように多様な利用側を援助していくには、こうした施設についても博物館の全体構想から外されるべきではなく、実際には規模や予算などの問題から設置できない場合でも、運営側は他の博物館との連携をとり、利用側に対し速やかに対応できる態勢を整えておかねばならないのである。

おわりに

博物館に関係する人々を運営側と利用側に分けて具体的に述べてきたが、運営側の根本には博物館法にあるように、資料を収集し、保存、調査研究して展示を中心とする教育活動を行う機関であるということから、利用側に対するアプローチとしてそれらの資料を展示して鑑賞させることが主となっている場合が多く、それによって教育普及活動をしていると捉えている。しかしこれまでみてきたように、博物館の利用側の意識はさまざまである。上記の分類からもわかるように必ずしも博物館の展示のみを目的に訪れる人ばかりではない。新しく設立する博物館にどのような施設・設備が併設されたらよいかという設問（複数回答）について見ると、「公園」（58.5%）、「喫茶店」（46.0%）が大きな割合を占め、以下「植物園」、「遺跡」、「売店」が3割を超えており、この結果は博物館にこのような付帯施設・設備への要望が高いことがわかる¹⁷⁾。

また前掲の表2および表4からもわかるように、博物館の展示や施設自体に関心や魅力を覚えて利用するというだけでなく、なんとなく行く、また暇だから行くというような人が意外に多いということも考慮に入れる必要がある。

博物館は、運営側が利用側の性別やあらゆる年齢、職業、そして彼らが持つあらゆるニーズを研究し尽くした上で、その特性に関して深い理解と認識を持ち、改めてその博物館の基本構想をもとに独自の特徴を出し、博物館法で定められているように地域との関連を深め、地域に根ざした社会教育施設を目指し、それを

実際に生かせる対応策を推し進めていく必要があると言える。

最近、文教施設のインテリジェント化について文部省から報告書が出されている。その基本的視点の第1は、高機能かつ多機能で弾力的な学習環境、第2は、文教施設の人間化、第3は、生涯学習の場としての文教施設である。筆者らが行った調査では、入館者へのサービスとして「映画」、「ビデオ」、「イヤホン・ヘッドホン」、「放送」、「パソコン」、「館員」による案内・説明を要望する人が多く、「障害者用設備」に対する要望も多かった¹⁰⁾。また、上で述べたように「公園」、「植物園」、「喫茶店」、「売店」、「レストラン」、「談話室」などに対する要望が高く、緑、安らぎ、憩いの場としての快適な環境を望んでいる人が多い。これらの市民の要望は帰るところ上の3つの基本視点に合致している。生涯学習時代を迎えて、博物館をインテリジェント化するには、多様化している利用側の要求に対応する博物館運営がますます重要な要素になっている。

注

- 1) 佐々木朝登「展示構成の意義」加藤有次・椎名仙卓編『博物館ハンドブック』雄山閣 1990年 pp.137
- 2) R. S. Miles, The Design of Educational Exhibits, George Allen & Unwin, London, 1982 (中山邦紀訳『展示デザインの原理』丹青社 1986年) pp.10
- 3) 伊藤寿朗「現代博物館の成立と矛盾構造」伊藤寿朗・森田恒之編著『博物館概論』学苑社 1985年 pp.5, pp.27
- 4) 倉田公裕著『博物館学』東京堂出版 1979年 pp.52
- 5) 佐々木朝登 前掲書(注1) pp.137
- 6) 伊藤寿朗「日本博物館発達史」前掲書(注3) pp.84~86
- 7) 伊藤寿朗「日本博物館発達史」前掲書(注3) pp.87
- 8) 高島慶子「百貨店内の美術館における展示の問題」(『MOUSEION』第30号 1984年) pp.10
- 9) 芹沢俊介「自然史系小中博物館における教育活動の構成」(『博物館学雑誌』1-2 1976年)

〈表1の補捉〉

研究層は、その道の専門家であり、研究者である。この層に対しては、研究資料の提供など、研究の便をはかるようにする。

アマチュア層は、もっと掘り下げて調べたいという高度の関心をもっている人々。町の天文家や自然保護団体のメンバーなどに多い。この層に対して

は相談に応じたり、助言する態勢が必要である。

勉強層は、あるテーマについて、まとまった知識を得たいという欲求をもっている人々。この層にはそれにこたえる説明（説明者、パンフレット、テープ等による説明）が必要である。

関心層は、何とはなしに関心をもっており、ざっと見てみようという人々。博物館を訪れる人の大部分はこれである。この層に対しては、より深い興味を抱かせるよう啓蒙が必要である。

- 10) 市村昇「博物館のマスコミュニケーションとカスタムコミュニケーション」(『博物館学雑誌』5-2 1980年) pp.20

〈表1の補捉〉

研究型は、この図の中で一番少ないタイプであり、自分が深めたいテーマを決めている、あるいは自ら調査研究を行っている人々を指す。

参加型は、展示を見るだけでは飽きたらない層であり、かなり明確な問題意識を持っていたり、積極的な行動を求める人々を指す。

見学型は人数が多く、展示が有効な対処方法であることはいうまでもない。ただ、この型にも割合無目的な暇つぶし型から、かなり目的がはっきりしている層まで、その幅は広い。

無関心型は最も人数が多い。この層に対しては適切な広報活動が必要であり、特に特別展などの催しは周知徹底することが必要であろう。

- 11) 拙著『調布市博物館市民意識調査報告書』調布市郷土博物館 1991年 pp.15

- 12) 前掲書（注11）pp.13

- 13) 前掲書（注11）pp.42

- 14) 前掲書（注11）pp.43

- 15) 野村東太「建築・設備の全体計画」前掲書（注1）pp.214

- 16) 前掲書（注11）pp.62

- 17) 前掲書（注11）pp.60

- 18) 前掲書（注11）pp.65